

Title	山本英史編 『近代中国の地域像』
Sub Title	Eishi Yamamoto, "Images of regions of modern China"
Author	山田, 辰雄(Yamada, Tatsuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	2013
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.82, No.1/2 (2013. 4) ,p.205- 215
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20130400-0205">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20130400-0205</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 山本英史編『近代中国の地域像』

本書のような編集された論文集において、編者は序文で編集方針を比較的明確に提示する。編者はあらかじめ研究の枠組みをもっていることもあるし、提出された各論文を総合することによって研究全体の方向性を示すこともある。それとは対照的に、各論文執筆者は自らの論文の内容に集中し、往々にして全体の問題の所在を見失いがちになる。あるいは、共同研究の過程で各研究者が問題意識を共有することもある。したがって、このような論文集は編者の提示する枠組みと各論文執筆者の分析との相互関係のなかで評価されなくてはならない。

編者の山本英史氏が序文を書いている。同氏は、本書の題名となっている「近代中国の地域像」研究の内包する意味を問う。編者は、「いち早く市民社会と産業革命

## 山田辰雄

を実現した西洋近代社会のあり方にある種の普遍的価値を見出し、それらの浸透度をもって社会が『近代化』したか否かを測る物差しと」する立場をとらない。そのような方法は近代中国社会の分析に適さないと考えられる。それとは対照的に、「革命史観」から解放され、豊富な史料に基づき中国そのものを見なおそうとする試みも行われてきた。しかし、その方法も「中国社会を概念化することに必ずしも成功していない」という。

そうであるとすれば、山本氏の「近代」と「地域像」との関係が問われなければならない。同氏によると、地域の近代化とは「それぞれ文化や習慣の異なる人間たちがいわゆる『グローバル化』によって互いに接触を深めるなか、共有する一つの空間にあって各々がより快適な

生活を営むためのシステムが叡智と努力の蓄積を通して改善され、進化することである」という。その分析が目指すのは、「中国が『西洋化』の波にさらされ、伝統的価値観の解体を余儀なくされるようになった時代、具体的には南京条約締結から中華人民共和国成立くらいのスパンにあって、極めてミクロな地域における人々の意識、生活様式、価値観、社会システムなどがどのような影響を受け、いかに変容」したかを見ることである。

本書全体を見渡してみると、分析対象は多岐にわたり、意図的に統一されてはいない。各章の論文は地域の研究史のなかで一定の位置を占めており、そこで使われている資料の広さと深さは評価されてよい。しかし、個々の論文を正當に評価することは私の能力を超えている。したがって、その評価は他の評者に委ねたいと思う。

以上の山本英史氏の問題提起を前提として、私は以下の三点から本書を論評していくことにする。第一は、「近代化」の契機とその内容を構成する諸要素の問題である。編者も指摘するように、西欧社会の発展のなかで見られる近代化の諸要素をそのまま中国に適用することが難しいという立場に私も同感である。山本氏は西欧諸国が伝統社会から近代社会に移行する過程で生まれてき

た諸要素を、「科学および科学思想に支えられた合理主義、自由、平等、博愛の精神に則った民主主義、秩序と公正を重んじた法治主義」であるとかくくつている。そこにはさらに、進歩と革新への信仰、宗教的権威からの解放、科学技術の発展、産業化、市場化、生産力の増大、都市化、交通通信手段の発達、教育の普及と高度化、政治参加の拡大、国民国家の統合と独立、国家機能の拡大と官僚制の強化などの諸要素が加えられてもよいであろう。これらの要素を「普遍的なもの」として中国を見るとき、そこには「中国社会への違和感」を山本氏は感じる。私の立場は、これらの諸要素を近代化症候群として捉え、西欧においても中国においても伝統社会から近代社会への変動過程で共通に見られる現象であると考える。問題はこれらの要素の組みあわせと優先順位の違いがそれぞれの社会の発展の特徴を決定するということである。それが、私の理解する「中国社会への違和感」である。

第二に問うべきは、近代化の要素が地域の特性とどのように結びついているかということである。編者が問題としているのは近代化の契機と変化の諸側面であり、「意識、生活様式、価値観、社会システムなど」であった。

第三の問題は、政治史研究者としての私の立場からすると、地域史、社会史が政治権力そのものを分析する必要はないが、その分析対象が政治権力と結びついているということである。したがって、個々の論文がどこまで政治権力を意識しているかにも注目していくことにする。

第一章 五味知子「近代中国の夫殺し冤罪事件とメディア―楊乃武と小白菜」は、一八七三年杭州府で発生した葛品連死亡事件について、楊乃武が葛の妻・葛畢が共謀して夫の葛品連を毒殺したのではないかと疑われ、斬首の刑を受けた事件を扱っている。著者は、事件そのものの解明よりも、この事件が冤罪であったことを証明する過程を重視している。五味氏は近代化の契機として新聞メディアの果たした役割に注目し、『申報』、*North China Daily News*、*North China Herald* の関連記事を分析した。杭州・浙江省と『申報』との関係、それと距離を置く英字紙、北京への上訴の過程を通して著者は「地域性」を意識している。さらに同氏は、「上訴制度の機能不全」や「拷問の弊害」がこの事件を生み出した要因であることを指摘した。それは政治権力の問題とも関連してくる。そうであるとすれば、なぜこのような状況を

生み出したのか、清朝の政治体制を問うのも興味ある問題である。

第二章 吉田建一郎「第一次大戦前後の青島における獸骨と骨粉の輸出について」は、第一次世界大戦前後の青島・山東における獸骨と骨粉の貿易の推移を通して日中貿易を扱っている。著者は骨粉貿易が日本だけでなく、インド・ベルギーにも広がっていく過程を跡付け、「個別商品貿易史の研究が、近代山東史における『一九一四年から二二年』という時代区分を一定程度相対化するうえで有効であることを示している」と結論づける。「一定程度相対化する」とはどういう意味か。これがこの研究分野における新しい発見であるとしても、何が青島・山東地域における近代化の契機であるかが問われなければならない。それは貿易なのか、日本の支配なのか、あるいは骨粉なのか。

本章は、山東省各地における獸骨・骨粉の生産状況を明らかにし、水路と港湾の観点から天津を重視し、これら商品の日本各地との貿易を論じている。その意味で、獸骨・骨粉という商品を通して、中国内地と国外の地域との関係性が意識されている。

最後に、この問題と政治との関連である。著者は、一

九一四〜一九二二年の「日本による占領統治」時期を分析の対象とする。この間日本に対する獸骨と骨粉の輸出は、増加傾向が続いたが、ここに「明確な時期区分を見出すのは難しい」、つまり貿易が画期的に増大したわけではなかったのである。そうであるとすれば、このような貿易の推移がどのように日本の占領統治や「地域」の官憲と関係していたかが問われなくてはならない。

第三章は、戸部健「平民教育と天津社会―中華民国北京政府期における『社会教育』の地域性」である。本章の主要な分析対象は、「中華民国北京政府期天津における学校式『社会教育』」である。ここでは二つの流れが取り上げられる。一つは、天津警察庁が創設・運営した「天津貧民半日学社」である。それは、警察庁主管のもとに義務教育を受けることができない貧しい人々に対し初歩的な教育を施し、社会進出を助ける『慈善的』目的を持っていた。この教育のいま一つの目的は、当時天津に流入してくる貧しい移民に教育を行うことによって治安維持を図ることであった、というのが著者の分析である。第二の流れは、五・四運動から生まれた学生連合会が主催する貧しい人々に対する「平民教育」であり、それが消滅した後には引き継がれた天津県教育局による平民

教育運動であった。しかし、これらの平民教育運動は後退し、その後も貧民半日学社が存続した。

戸部氏は、流入してくる移民の教育と治安の観点から貧民半日学社を取り上げ、それが全国的に見て天津に特有な運動であったことを指摘することによって、この運動の地域性を意識している。また、これらの教育運動が五・四運動や天津市の官憲の背景のなかで論じられていることから、著者が間接的にはあるが、当時の政治情勢を意識していたことがわかる。

戸部氏は、「近代社会を構成する重要な要素の一つに初等教育…の義務化がある」と考える。つまり、初等教育の義務化・普及が近代化の契機として捉えられている。天津市における「平民教育」もその延長線上にあった。そうであるとすれば、学生連合会や天津県教育局の運動が後退し、貧民半日学社が存続したことを近代化の一環としてどのように説明するのであろうか。

最後に、本章の表題のなかに「平民教育」と『社会教育』という概念が現れる。本稿における分析対象との関連でこれら二つの概念がどのような関係にあるのか、不明確である。その論理的整序が望まれる。

第四章 宮田義矢「山東省の乩壇と地方官僚―濟南道

院前史」は、二〇世紀初め山東省で起った小さな崑壇がより大規模な済南道院に發展していく過程を実証したものである。本章を論評するに当たり二つのことを明確にする必要がある。一つは、「前史」とはどの時期を指すのかということである。ここでは、済南道院成立までの時期を意味するのか、あるいはそこには道院そのものの活動の時期が含まれるのか、なぜ「前史」を問題にするかなどの説明が必要となる。いま一つは、「崑壇」という漢語が直接使用されているが、本章を見る限りそこには多様な内容が含まれていることである。著者はこの概念をどのように定義するのであろうか。

山東省の濱県で始まった濱壇（崑壇）は、地域の宗教団体、それを司る宗教指導者と結びつき、地方官僚層の協力を得、さらに他の宗教団体との交流を通してより普遍的な教義を持つ済南道院に發展していった。彼らは、濱県大仙洞の真宗山人、尚仙を敬い、後には太乙老人を最高神として仰いだ。特徴的なのは、この宗教活動に呉福森らの地方官僚が関与したことであった。彼らは逆に、この組織を通して教育の近代化、治安の維持などに努めたのである。やがて初期の指導者は分散し、済南に移り済壇を形成した。それは、同善社、国民道德会などと交

流しつつも独自の道院組織を維持していた。道院は五教合一論（儒、道、仏、キリスト、イスラム）を説き、より普遍的教義を主張することによって都市の名望家層や民衆のなかに浸透していった。

この運動が地方官僚層との協力関係において發展したことを説明することによって、著者は政治権力の問題を意識している。この運動が山東省の一地域から發展したことが明らかにされるが、それは山東という地域的特性をどこまで反映していたのであろうか。さらに、この宗教の發展過程について、編者の山本氏が提起した近代化の契機がどのように意識されていたのであろうか。

第五章は、大道寺慶子『婦女雜誌』の母乳育児論に見る身体と近代―日中比較の視点から―である。本章は、日本の『主婦之友』との比較において、一九一五年―一九三一年に上海で発行された『婦女雜誌』の論説を分析している。著者の立論の根底には母乳育児論がある。それは母乳の子供に対する精神的・肉体的影響、乳母、胎毒、牛乳を中心とした獸乳などの問題を内包していた。

大道寺氏が扱ったのは、これらの問題が近代都市・上海でどのように考えられ、実践されていたかということである。近代化の進展の過程で婦人が社会的に進出する

こと、その環境における乳母の役割、産児制限論の流入、その反面富強を求めるナシヨナリズムにもとづく健康な子供の成育、そのための近代的良妻賢母による母乳育児論が唱えられた。著者は、この雑誌が刊行された上海の地域社会を想定しつつ、さらに「上海に代表される観念的『近代都市』の容貌を浮き彫りにしよう」としている。つまり、上海という地域に近代の普遍性を付与しているのである。著者はまた、直接政治権力に言及していないが、育児論がナシヨナリズムに結びついていた点を指摘した。その意味で、本章は近代化・地域性・政治権力に言及している点で評価される。

第六章 山本真「福建省南西部農村における社会紐帯と地域権力」の出発点は、一九四〇年代の満鉄による河北農村調査に基づいて中国社会の構造を一般化することに対する批判にあった。著者は中国の「社会構造の地域的偏差」を認め、華北との対比において福建省南西部の龍巖県適中鎮の調査を通して華南の社会構造を明らかにしようとした。

山本氏は自ら適中に入り、血縁・地縁・神縁の「重層的」関係から清代におけるこの地域の社会的紐帯に基礎を置く政治権力を解明した。ここでは、三つの側面にお

ける相互関連の分析への言及は省略する。注目すべきは、清代におけるこの紐帯は形を変えながら中華民国時期まで引き継がれ、それが基本的には革命運動・国家権力に対し地域社会の自立性の基礎となったことを著者が見出していることである。その意味で、地域の紐帯を明らかにし、自立性を維持するという点で、山本氏は政治権力を意識している。同氏はまた華南社会の地域的特徴に注目した。著者は、華北の社会との対比において華南社会の社会的紐帯の強さ強調している。本章から読み取る限り、華北社会の特徴は共同体の欠如と著者は理解しているようであるが、最初の問題提起に照らして改めて華北社会の特徴を明示してもらいたいと思う。最後に残された問題は、ここで分析された華南の社会的紐帯が中国の「近代」とどのように関係しているかである。山本氏の回答を待つ。

第七章 山本英史「近代蘇州における基層社会の管理と郷村役」は、本書の編者の論文であるがゆえに、問題の視角は最も明確である。地域性、近代化、政治権力の問題が取り上げられる。

著者が蘇州を取り上げた理由は、生産力の高さ、高度に発達した地主制、上海に近接するが故の西洋化の影響

にあった。しかし、それは「一つの固有の地域」であって、中国の近代を一般化するものではない、というのが山本氏の問題意識である。

著者によると、中国歴代の王朝支配は、単純化すれば「錢穀」（資源）と「刑名」（秩序）の確保を目的とした。そのためには国家権力を基層社会に浸透させる必要がある、基層社会で国家権力を代行し、管理する人材が必要であった。それが「郷村役」である。本章は、清末から民国期に至る蘇州の郷村役に焦点を当てている。

清末蘇州の基層社会の管理者は、徴税・治安維持・雑般業務を担った「地保」（あるいは「地方」と土地情報管理義務を担った「経造」）からなる。このような郷村役は南京国民政府の改革の下で名称は変化した、基本的には民国期を通じて存続したことを著者は実証している。山本氏は、「伝統的な国家構造にあって郷村役は国家にとって必要であるばかりでなく、基層社会の郷民たちにとっても不可欠な存在であった」と述べ、その積極的な役割を評価している。ここで指摘されているのは、清末から民国に至る中国の近代化過程において伝統的郷村役の存続であり、近代化の過程が必ずしも伝統的構造の否定の上に進行しなかった中国社会の特徴である。

山本氏は、この結論を導き出すための補完的手段として蘇州付近の人々の聞き取り調査を試み、それによってより具体的に「地域性」を注入しようとしている。また、郷村役を中央の国家権力と基層社会との仲介者として捉えることによって、明確に政治権力が意識されていたのである。

第八章 村松弘一「西安の近代と文物事業―西京籌備委員会を中心に」は、日中戦争時期の西安における西京籌備委員会に焦点を当て、国民政府下の文化事業を述べたものである。この時期西安付近でいろいろな組織によって文物保存事業が展開されたが、著者はこれらの組織の重層的活動に注意しつつ、分析の主要な対象を西京籌備委員会の一九三二年―一九四五年の活動に絞り込んだ。村松氏の認識する西安の地域的特徴は、古都であり、歴史的文物が豊富であること、日中戦争のなかで背後に西北開発の問題が存在していたことであった。このことが、文物事業の在り方に影響した。

著者にとって「近代」とは何か。それは一九三二年―一九四五年という期間に限定されるものではない。本章を読み込む限り、村松氏は中国の国民国家としての近代的統一を念頭に置いていたようである。つまり、近代



における新しい中国の創出の一環として文化・文物の保存、そして文物の海外流出の阻止が必要であった。その背後には辛亥革命以来の、特にこの時期においては抗日ナショナリズムがあった。村松氏の関心の一部は、このような歴史意識のもとで行われた文物事業の実態と組織を整理・叙述することにあった。私の観点からすれば、そのような事実が「政策」や「思想」との関連において分析してもらいたかったと思う。

すでに言及したように、この事業は当時の政治と密接に関連していた。特に西京籌備委員会は国民政府の直接的指導下におかれ、政府はまたこのような事業を通して、権力を社会に浸透させていったのである。

第九章 関根謙「戦時首都重慶の形象をめぐって―抗戦時期文化界の状況とキリスト教会各派の活動」は、抗日戦争時期の重慶におけるキリスト教徒の活動を説明したものである。

著者の「地域」としての重慶に対する意識は鮮明である。言うまでもなく、それは抗日戦争時期の首都であった。戦時の外省人の流入による人口の急速な増大、猛烈なインフレによる経済の破綻、生活の困窮によって、「日本の侵略への抵抗の都市」、そして時には対立者の中

国共産党によって「暗黒の反動統治の地」というイメージが作り出された。

国民政府の支配はこのような状況下の重慶に十分浸透しなかった、というのが関根氏の見方である。同氏は重慶文化界の活動を概観し、その「活況」を描写している。その根底にあったのは、抗日に支えられた「非官制組織」の主體的で真摯な活動であった。その限りにおいて、重慶文化界には「自由」があった。

著者は、歴史的資料と今日における聞き取り資料を用いながら抗戦期以前と抗戦期の四川省、特に重慶市のプロテスタント系キリスト教徒の運動を再現した。ここでは、政府と関係を持ちながら、なおかつより独立的立場から展開された彼らの運動が紹介されている。キリスト教徒を動かしたのは「抗日救亡」の意気込みとキリスト教徒としての高い倫理性であった。

以上のことから、関根氏は本章で分析対象の地域性と政治権力を意識していたことがわかる。最後に問わなければならぬのは、このキリスト教徒の活動が中国近代との関連でどのような意味を持ったかである。著者は結論の最後の部分においてこの時代に彼らが達成した成果が現代の中国におけるキリスト教の在り方にも引き継が

れていることを示唆している。関根氏にとって中国の近代とは何か。キリスト教か、抗日戦争か、社会における文化の自立性なのか、その見解を伺いたいと思う。

第十章は、一谷和郎「日中戦争期晋冀魯豫辺区の貨幣流通」である。日中戦争は日本と中国との戦争であるが、その実態は決して単一の戦争ではない。中国の戦場は日本軍占領地域、国民党支配地域、共産党支配地域、その他の中小権力から構成されていた。したがって、日中戦争の研究において権力の区画が重要な問題となる。

一谷氏は、日中戦争中の最も重要な共産党支配地域の一つである晋冀魯豫辺区（山西・河北・山東・河南）を選び、貨幣流通を通して日中戦争の構造を解明した。一九四一年九月に成立した冀南銀行は共産党の指導下に置かれ、「冀南幣」を発行した。ここで描かれているのは、冀南幣と国民党系の「法幣」、日本軍支配下の「中国聯合準備銀行券」との競争・抗争である。その推移は、戦争の展開とそれに伴う共産党支配地域の変化を示している。冀南幣は、戦局のなかで拡大する共産党の支配とともに流通地域を広げ、「辺区本位貨幣」として「貨幣主権」を主張するに至った。

このようにして、貨幣流通を通して共産党の権力の浸

透と地域的画定、さらには日中戦争の構造が明らかにされた。それは、一九三〇年代～一九四〇年代の中国の「近代」の一地域の歴史像を示している。しかし、この局面は中国の近代的発展⇨近代化とどのように関係しているのだろうか。著者は、冀南幣がやがて内戦を経て中華人民共和国の成立に結びつく可能性を示唆している。そうであるとすれば、この貨幣流通の研究が中国の近代的歴史発展にどのように寄与しているのか、さらに問われなければならない。

第十一章 佐藤仁史「回顧される革命―ある老基層幹部のライフヒストリーと江南農村」は、農村社会史研究に口述調査を導入することによって地域社会の構造を解明しようとしたものである。本章の主要な分析対象は『一生経歴』であり、それは一九三〇年に江南農村の貧農の家に生まれた男が共産党の革命に参加するなかで農村基層幹部に成長していく過程について書いたものである。さらに著者はそれを補うべく口述調査の努力をしている。

『一生経歴』で語られている歴史は一般の農民と比較すると特徴的である。この男性が村の基層幹部になるためには村における党の政策の実行に貢献しなければなら

なかった。それ故に、「地域とは『上』の指導する思想・政策が貫徹される」場であった。その根底には、党によって与えられた「単純化・通俗化された階級闘争史観」があった。

佐藤氏は、一九五〇年代の土地改革に対するこの基層幹部の参加を通して上記の主張を検証する。この幹部の視点は、「党の政策をいかに地域において遂行したか」ということにあった。この観点から『逸脱』する事実は語られなかったのである。回想される記憶と「事実」との間には距離があり、それはまた一般村民の感じ方とも異なるものであった。ここに著者は、「上級権力との関係がみずからの正統性の根拠であった中国建国後における農村リーダーの典型」を見出している。当然のことながら、この幹部の視野から欠落する部分も存在する。それは、教育の普及・近代化、伝統的村落の村廟の運営の問題であった。

本章は、基層幹部の回顧を通して中華民国時期から中華人民共和国時期に至る中国江南農村の近代的発展過程を明らかにした。ここでは、この幹部が参加した土地改革の政治過程を通してその地域が直面した諸問題が論じられた。本章の注目すべき点は、人の歴史的回顧が事実

のある側面に光を当て、別の側面を無視していることを検証したことであった。そのなかで、地域・政治・近代が結合していたのである。

第十二章 岩間一弘「上海における美食街の誕生——雲南路と小紹興酒家を例として」は、その題名の示すように、上海雲南路にある小紹興酒家というレストランに焦点を当て、上海の美食街（グルメストリート）の盛衰を論じたものである。その内容を見る限り、「誕生」ではなく「盛衰」を論じていると理解される。

中国の近代を論じるとき、その典型として上海が取り上げられることが多い。岩間氏は、まず民国期の雲南路における「美食街」の歴史的成立過程を論じる。美食街とは、「多くの飲食屋台・露店が建ち並んだり、複数の飲食店が集中したりしている商店街」のことである。著者の主要な関心は中華人民共和国時期における雲南路の盛衰にある。その意味で、分析対象としての地域は明確である。

問われなければならないのは、地域と近代との関係である。著者にとつて、美食街の発展それ自身が近代化と同等されているように思われる。街の「現代化」には、運営組織の株式会社化、衛生状態・生産工程の改善、世

界的標準に合った料理の創出などが含まれていた。

さらに、民国期の繁栄から転じて一九五〇年代に至り節約が励行されたこと、文革時代の混乱、改革・開放時代の到来のなかで外食産業が復活する過程が明らかにされている。このようにして、著者は美食街の発展が政治過程と結びついていることを示唆していたのである。

以上において私は、地域、近代、政治の三つの観点から各論文に論評を加えてきた。繰り返しになるが、それぞれの論文における詳細な事実の分析がその分野の研究史に果たした貢献については直接言及しない。それは他の評者に譲ることにする。

各執筆者は特定の地域を分析対象としている。しかし、地域の選定そのものが本書の目的ではない。地域の特徴が分析対象のなかにどのように反映されているかが評価の基準であった。中国の近代化とは何か、各章において執筆者は何を近代化の諸要素として捉えていたかを私は問題にした。政治は、あらゆる社会現象は直接、間接を問わず政治権力に関係しているという政治史研究者としての私の視点である。全体を俯瞰すると、多くの執筆者はこれらの視点に直接・間接に応えていくくれる。しか

し、一部の章はこれらの視点に触れることなく、事実の分析に埋没しているものも見受けられた。

編者の山本英史氏が言うように、本書の目的は「様々な地域の多岐にわたる事象を徹視的に取り上げること、ひいては多元的な要素で構成された中国という巨大地域の『近代化』の意味を問う」ことであった。そうであるとすれば、その上に成り立った『近代中国の地域像』とは何か。何人かの執筆者によるこの問題に関する座談会が最後に付されることができれば、本書はさらに魅力的になったことであろうと思われる。